



小田高 11 期通信

2011 年 12 月 1 日発行
第 8 号

In the center of your heart and my heart, There is a wireless station; So long as it receives messages of beauty, Hope, cheer, courage and power From men and from the Infinite, So long are you young.

初めに言葉ありき

4 組 今道周雄 cimamich@juno.dti.ne.jp

編集者代表：
今道周雄

歳をとると昔を懐かしむ心が時折湧いてくる。古いアルバムを引っ張り出したり、古い記録を見直したりする。一冊の古びたノートがある。高校入学と同時に良いと思う言葉に出会うとこのノートに書き付けてきた。最初のページに書かれているのが「初めに言葉ありき」（ヨハネによる福音書第 1 章第 1 節）である。私はキリスト教徒ではなく、なぜこの言葉を冒頭に書いたのか記憶がない。だが、それに続く「言葉は神と共にあった。言葉は神であった。この言葉は神と共にあった。すべてのものはこれによってできた。」という文章に多分強烈な印象を受けたのだろう。それ以後半世紀にわたり、ぽつりぽつりと「言葉」を書き付けてきた。

読み返してみると、我ながら恥ずかしくなるほどロマンチックな言葉が多い。手当たり次第に読み、そして書き付けてきたそれぞれの言葉は、心を動かす力があり、元気づけられたり、慰められたりしたのだと思う。だが、中には無意味なものもある。例えばロバート・ケネディ を暗殺したシーハンの言葉が書き付けられている。

“They can gas me, but I am famous. I have achieved in one day it took Robert Kennedy all his life to do.” なんと不毛なことばであることか。

歳を取るに従い、漢文からの抜粋が増えている。これは漢文が短い文章にも関わらず、豊富な意味を含んでいるから惹かれるのだと思う。漢文の出所は「詩経」「漢楚軍談」「三国志」「杜甫」などである。漢文の簡明さがよく現れていると気に入っているのが「漢楚軍談」に出てくる次の言葉である。

- 天子の八徳：仁孝聡明敬剛儉学
- 宰相の八徳：忠直明瓣恕容寛厚
- 元戎の八徳：廉果智信仁勇巖明（元戎とは将軍のこと）

短い文章で痛烈な英文もある。例えば、マイクロソフトの創始者である Bill Gates はこんな事を言っている。

If you born poor, it's not your mistake. But if you die poor, it's your mistake.

やれやれ、我が人生は間違いであったか。だがこんな辞世の句を読んだ人もいるのだから、いまさら貧乏を悔やむ事もあるまい。

● 皆人の世にあるときは数ならで、憂にはもれぬ我が身なりけり。佐介左京亮貞俊
ところで、小田高11期通信の言葉も読者に大きな力を与えていると信じています。これからも、是非皆さんの人生の粋を言葉に込めて、「小田高11期通信」へ送って下さい。

目次

- 初めに言葉ありき
今道周雄
- 縁起をかつぐ
山本悟正
- 我が人生に悔いはなし・・・?!
榮 憲道
- 徒然なるままに釣れ釣れの記
佐々木洋
- 近況など
山本哲照
- 内田晶二郎君を偲ぶ
江木紀彦

縁起をかつぐ

3組 山本悟正 gosei@rd6.so-net.ne.jp

人は摩訶不思議な幾多の縁（えにし）で繋がっているようだ。みんないい縁にあやかりたいと折々に縁起を担ぎ神仏に手を合わせるのだろう。

私は元号が平成になってから数並びの縁起がいい日はその年の無事を祈り『幸』につながる駅名の記念切符を買うことにしている。平成は1月8日から始まったので1月1日はなく始まりの平成1年1月1日1日は日本橋駅発を買って、平成2年2月2日は明治神宮前駅、3並びはJR恵比寿、4並びは永福町と自分流を選んで買った。平成5年5月5日は仲人を頼まれ芝のホテルへ行ったので内幸町駅で買った。偶然5月5日は我々夫婦が吉祥寺で結婚式を挙げた記念日で、仲人とは縁のあるいい日だ。

平成22年2月22日は「富士に虹」ということから富士見ヶ丘駅で買おうと思ったが「縁起記念切符」はなく仕方なく普通の切符を5枚買った。日付が一番下に小さい文字で<2010.-2.22>と和暦ではなく西暦表示だった。

嘗てはこういう縁起のいい日は多くの駅で和暦表示の記念切符セットを発売していたが2000年のコンピューター日付4桁表示問題に端を発し何の日付も西暦表示になり洒落が通じなくなった。縁起の数並びは平成22年が最後で23年からは数字が並ばなくなる。平成22年2月22日、2に縁のある“縁起のいい処はどこか”と考えた。自分に縁の深い小田原城・二の丸跡に二宮金次郎を祀っている「報徳二宮神社」がある。

高校時代、城の中にある女子高の生徒と密かに待合わせをした思い出の神社だ。ずいぶん経ったがまさか我が校がこの女子高と合体するとは思わなかった、ご縁だ。

一昨年秋小田高同期「卒業50周年を祝う同窓会」が行なわれた縁起のいい神社である。その時、半世紀ぶりに吹奏楽部の仲間と再会出来た。全体の記録写真を撮っていたのは8組の大藤尚士さんで4組の米山勉さんと共にクラリネット奏者だ。アルトサクスの6組長谷川勝さんとは高校生活最後の夏休みにトランペター1組鈴木英作さんと3人で伊豆へ一週間徒歩無銭

旅行をした<青春の大切な思い出>がある。この再会は思いもよらない嬉しい出来事だった。

よし！<二>がずらりと並んでいる。『福日』だ。方角も恵方の西南西だ。日付ぎりぎりの夜中ではあるが、時間きっかり、神社にFaxを入れて『招福』祈願をした。平成22年2月22日22時22分22秒二の丸・二宮神社だ。2が13個つながる。<陰の数>2が<陽の数>13個並ぶと陰・陽の釣合いが取れて安定する。

ちょっとセコイが22時過ぎに遠方の神社参りするほどまで凝っては気持ち悪い。単なる<駄洒落・縁起担ぎ遊び>だ、神仏詣はご利益を期待するのではなく、神や仏に日々の無事を感謝し、心がけを誓う「縁起担ぎ儀式」だと考えている。

平成23年5月15日母校小田高のホームカミングデーに縁ある旧友たちが集まった。



鉄筋の新校舎（校章がいい）

模擬店が出て弁当・おでん・飲物などが売られた

これに合せて3組「古稀のクラス会」をとの話が出て、3組の江木紀彦さんが3組幹事の辻秀志さんに呼びかけ、いい機会なので4組の太田充さんが講師の「放射線の話」講演を聞いてその流れでクラス会はどうかとなった。講演会は11期通信編集主幹の今道周雄さん（4組）、佐々木洋さん（3組）も推進役をすることになり資料作成、資料投影システム作成や学校との交渉、PRチラシ作りなどが始まり実現したそう。折しも会場は縁起の良い<現3年3組>の教室だ。呼びかけが充分ではなかったにもかかわらず教室をはみ出す盛況で、講演内容が実にタ

イムリーで深刻な問題だけに感心は強く、講師が同期生という親近感と信頼感もあって、素直に理解出来、放射線の認識が深まりとても有益だった。



太田充講師による『放射線の話』講演

新しい3年3組コンクリート教室(昔の木造教室が懐かしい)

太田さんが説明する「放射線ホルミシス」という低放射線の健康効果は東北の有名な温泉、台湾、ブラジルなど歴史的事例や自然界の種々放射線の数値が示され説得力があった。放射線教育の重要性も研究者独特な物静かな口調で強調された。放射線は切迫した現実であり、我ら同期で足柄茶生産者であり被害に直面している8組安藤彬さんなどからも切実な質問が続出し時間オーバーになる大成功であった。

神の摂理とも思われる未曾有の大震災・大津波・原発大事故併発、同期の縁で結ばれた友人達との再会、時と人が織り成す「一期一会」であった。

その流れで『古稀』同窓懇親会が城址公園協の「東岳庵」で行われた。東岳庵はいわき市で未曾有の大震災と原発事故に遭い避難中の3組佐々木洋さんの実家だ。

東は今年の干支・兎の方角であり、日の出の東南は古稀を迎えた我々の干支・辰巳の方角(巽)であるから「東を岳ぶ庵」とはこれまた縁起がいい。

11期通信を受信する度に今道さんは誰だっけ?と聞いていたが、今回懇親会で会えたら、なんと吹奏楽部で彼はトロンボーン、私がトランペットを吹いてベートーヴェンの「運命」を吹奏した旧知のメンバーではないか。今道さんは真面目で優秀な楽員であり私は不真面目なリーゼント髪不良悪戯鬼楽員で



みんな若いまだ青春!(前列左端:山本悟正)

あったが今は白髪に変身しているので互いに昔の名前と顔が一致しなかったが半世紀ぶり「運命」の嬉しい再会だった。

我が吹奏楽部のオープニングテーマ曲は戦艦の出陣<錨を上げて>だ、我々もまだ!まだ!大海原へ<錨を上げて>船出だ。二次会は辻さんの先輩がやっている店でコーヒーを飲みながら更に白熱競論、辻さんは今後このような会はクラスに拘らず同期全体に広げたいと云う・・・『異議なし』・・・辰巳の吾らが七七歳を迎え「岳寿の会」もこの東岳庵できるとLucky 7 7 7だ。とにかく、古稀まで無事に生きて来られた幾多の合縁奇縁をお天道さまに「感謝」すべきだと思っている。

今年、東日本大震災の状況を背負った過酷な猛暑の中、世界に大和撫子の底力を示して勝ち上がり女子ワールド・サッカー優勝を成し遂げた『なでしこ』の奮起に感動した。

『<なでしこジャパン>の快挙に感謝!』の声が沸騰・・・同感。強い絆で結ばれた団体の国民栄誉賞には誰も異論がない。国民栄誉賞第一号:王さんは我々と同学年で高校三年間甲子園4季連続出場し優勝もした我ら高校生のヒーローだった。我校の野球部部長・6組市川陸雄さんも早実の王さんとは関係ないが「オーさん」と呼ばれていた。

撫子は我が子を撫でるような可愛い花と命名され、花言葉は「気高い、堂々とした」とある。瓦礫が片付いた野原に日本中の歓喜の<気>が集中した縁起の良い花『なでしこ』を沢山咲かせたらきっと善い

ことが起りそうだ。

私が若い時一緒に写真家グループ事務所を開いた仲間の奥さんが交響楽団の団員でビオラを担当している縁から定期演奏会は10年来聴きに行っている。今年の定演は7月31日に行われ、指揮はベートーヴェン第九で有名な「炎のコバケン」こと小林研一郎で娘さんのピアニスト小林亜矢乃さんとの夢の親子競演が実現したとても楽しく格調の高い素晴らしい演奏会だった。



小林研一郎と娘・小林亜矢乃

お陰で青年時代一緒に事務所を作った強い絆のカメラマン仲間4人がこの音楽会が縁で久々に再会することが出来た。アフターコンサート（飲み会）では皆無事で元気にやっていることを歓喜しく苦しく・よかった昔を懐かしむ話が尽きず旨い酒が飲めた。

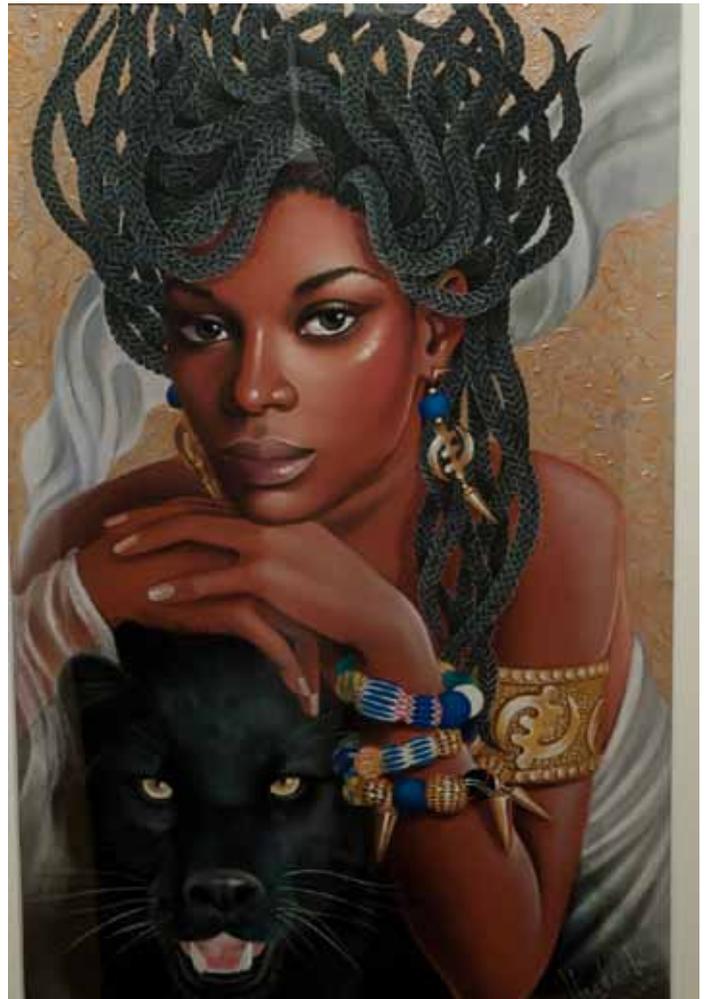
翌日の8月1日NHKのDeep Peopleで「世界のスーパー指揮者」と題し小林研一郎・広上淳一・下野竜也の3指揮者によるベートーヴェン第九の指揮対決が放送され昨日指揮を観たばかりの我々と同じ年のコバケンさんへの親近感が更に増した。

私が中学三年の時、芸大を卒業したばかりの音楽の男先生が着任し一年間ベートーヴェン第九の合唱「歓喜の歌」をドイツ語で歌わされ、この先生から多くの影響を受けた。小田高吹奏楽部では第五「運命」を二年間演奏し、三年の世界史の授業「世界史の人物」自由研究発表で私は題を「ベートーヴェン第九」としたら担当の川崎先生は「何で人物でなく曲名なんだ？」と首をかしげた。私にはベートーヴェンは験（げん）がいいのか縁があるようだ。

縁（えにし）とはそういうことだと思っている。

小田高三年間同じクラスだった3組池島豊さんとは小中も同じ学校の長い付合で住まいも同じ小田急沿線と縁が深まり、沿線の中高同窓たちで「辰の落し子会」を作っている。池島さんは早稲田OB「稲門会」絵画展のリーダーであることから、昨年、友情出展を誘われ写真を出展したら3組幹事の辻さんがクラスの代表で観に来てくれた。今年9月にも誘われ参加すると今年も辻さんが、毎年来てくれるという7組須藤一雄さんと一緒に来てくれた。そして、

昨年観に来てくれた私の中学3年クラスメイトの女性が声をかけて同じく同級生の女流画家・内藤紀子さんが会員外であるがガーナに25年在住し創作した個性的なアフリカンアート：パステル画の友情初出展をし「青春」の縁が「いまだ青春」の輪につながる縁を起した。私の縁起担ぎは<今日も無事で、いいことに出会える>ことを願う「おまじない」なのだ。



<Sheena and Panther>

内藤紀子オウス画

アフリカ・ガーナの美人画

我が人生に悔いはなし・・・？！

6組 榮 憲道 sarara@hm8.aitai.ne.jp

石原裕次郎といえば、美空ひばり・長嶋茂雄と並び戦後の昭和を代表する大スターである。『太陽の季節』で芥川賞を受賞した石原慎太郎の弟で、正に《太陽族》の申し子。時代の先端を歩き、映画の世界では日活の全盛期を創出、“憧れの女優”北原三枝と結婚、その後も石原プロを設立、長く芸能界のドンとして君臨した。また《歌手》としても数々のヒット曲を飛ばし、独特の裕ちゃん節は一世を風靡、今もカラオケでは中高年男性の定番となっている曲が多い。これだけ充実した人生を送った人間は稀有といえよう。

彼は、私より7歳年長の湘南育ち。同じ神奈川県でも、西湘と呼ばれた小田原のそのまた農村地帯に育った私にとっては、《湘南ボーイ》は近くて遠い、眩し過ぎる存在であった。

その裕次郎に「我が人生に悔いはなし」という歌がある。四十代半ばに難病に倒れたが復調、その再起を期して選んだのが、なかにし礼作詞、加藤登紀子作曲のこの曲である。歌は「長かろうと、短かろうと、我が人生に悔いはなし」で締めくくられている。死を暗示するような題名と内容、周囲からは反対の声が高かったそうだが、本人は覚悟の選択であったのであろう。好漢惜しむらくは52歳の若さで逝った。そして、この曲が彼の晩年の代表曲となった・・・。

私は今、娘一家と共に名古屋に住む。転勤族のなれの果てで、故郷から遠く離れた《想定外》のこの地で林住期を迎えている。彼のような人生と程遠い凡人にとっては、何はともあれ長生きの方がよい。不肖私の人生も悔いが多く、まだ見届けたい事象、やり残したことがかなりある。せめて男性の平均寿命である80歳を超えるまで、穏やかで充実した老いをおくりたい。そして、ピンコロリの大往生ともなれば「悔いはなし」と、少しは胸を張って言えるかもしれない。

(2011年の秋)

徒然なるままに釣れ釣れの記

3組 佐々木洋 hirosHis@peach.ocn.ne.jp

「好きこそものの上手なれ」の反面で、「下手の横好き」という言葉がありますね。私の魚釣りの場合は残念ながら後者の方ですが、下手だからこそドジ話や失敗談も多いのではないかと考えています。徒然なるままに「釣れ釣れ」の思い出話などを書き綴ってみますので、釣り体験豊富な方はドジさ加減に呆れただけであれば結構ですし、釣り体験のない方には、バーチャル釣り体験でもしていただければと思います。この駄文が契機となって、「もっと面白い体験談があるぞ」という諸兄からの投稿が相次げばいいなとも思っています。

(Part 1) ゴー、ゴー、豪州、釣りバカ日記

この9/30-10/9のオーストラリア・ブリスベンへ”旧婚旅行”に行き、釣りを楽しんだり楽しめなかったりしましたので、まずは我が釣りバカぶりのご紹介を兼ねて、この最新情報(冗報?)をお届けします。

釣ってくるぞと勇ましく

昭和38年に就職してちょうど38年間在籍していた東芝の、所属していたコンピュータ部門に、若手を中心とする「釣魚隊」というのがあります。ふとしたきっかけから釣魚隊入りした私は、断トツな年寄りでしたので“顧問”として祭り上げられたのですが、そのまま今日まで居座り続けています。隊長を務める吉武雄介さんが偶然「名門小田原高校」の後輩だったということがあとで分かって、私の方からの親近感が一層高まったこともあって、時折、釣行をともにしたり釣果報告をし合ったりしています。今回も、“豪州”への“豪遊”を前に「釣魚隊」メンバーに対して、以下のように“豪語”しておりました。

オーストラリア人の友人Jasonが、帰国前日の10/8に深海釣りをしようアレンジしてくれていますので、1968年に釣り上げたモロコの1m11kgのレコードを、およそ40年ぶりに更新できるのではないかとワクワクしています。ゴールドコーストの栈橋での

ブリーム釣りに再挑戦するつもりでいます。大型のシロギス（現地では「ホワイティング」）も釣れるということです。国内では未実現のヒジタキ（首の部分をつかむと尾が肘を叩くという噂の超大物シロギス）ゲットができるかも。

ゴールドコーストJetty 前哨戦

ゴールドコーストは、私の宿泊地ブリスベンの市街から車で1時間位のところにあるのですが、そこにJettyと呼ばれる大栈橋があります。甚だいい加減な推定ですが、全長200-300mでしょうか、沖に突き出していて、海面からの高さも4-5mはありそうです。実は6/15-23にもブリスベン旅行をしていて、その中の一日(6/18)現地在住の若き日本人の東浄さんにこの連れてきてもらった時にJettyで撮った写真をご覧ください。



Jetty 大栈橋での釣り

この時は東浄さんからお借りした釣竿をお借りしていますが、足元の水深がかなり深いので船釣り用の竿でも何とか役に立ち、この時は30cm級のブリーム3尾の強い引きを堪能することができました。なお、6月と言えば南半球は冬ですが紫外線が強く、サングラスは必携品で、その時は中継に立ち寄ったケアンズ空港のあちこちでもサングラスが売られていました。このJettyからは、その名の通り黄金色で長く続く美しい砂浜越しにゴールドコーストの市街を眺望することができます。



ゴールドコースト市街の眺

再び Jetty 上に立つ“師弟”

さて、今回のブリスベン旅行は、同じく格安のジェットスターですが、ケアンズ乗り継ぎではなくて成田・ゴールドコースト往復のフライトにしました。そして、空港まで迎えに来てくれた長女の車でドライブして、オーストラリア最東端にある美しいバイロンベイの観光。遠くにでしたが、鯨を見ることができました。そして、韓国料理店でのバイキング料理で、初日の慌しい日程を終えブリスベンの友人宅で旅装を解いた翌日(10/2)、“旧婚旅行”を一旦中断して夫婦別行動をすることとして、私は若き釣友となった東浄さんと再会して、そのドライブによりゴールドコーストへドライブ。再び Jetty の上に立つことになりました。

東浄さんの年齢は私のほぼ半分。従って、釣り歴も大分格差があって、車中での釣り談義で東浄さんは私の講釈に頷いたり驚いたりするだけです。それでもって、“実技”はともかく、“学科”の方ではすっかり師弟関係。そこで、「今日はホワイティングを狙おう」という“師”の提案がすんなりと受け入れられ、途中にある釣り餌店でワームを仕入れて臨むこととなりました。今回は私も気合が入っていて、日本から振り出し式の投げ竿と大型リール、それに、3本針の投げ釣り用仕掛けを携えていったの挑戦でした。

“外道”のブリームをゲット

土曜日とあって、Jetty の上は、子供づれも含めた釣

り人でかなりにぎわっています。私たちは、ほぼ予定通り、午後2時に釣り始めたのですが、オーストラリアにも潮時というものがあるのでしょうか、暫くは魚信（アタリ）がなく、東浄さんの二本竿の一つに來たホワイティング1尾だけという釣果でした。しかし、「これじゃ、憲豪（東浄さんの赤ちゃんです）の食べる分しかないよう」という東浄さんの嘆き節が出てすぐのこと、私の方にガツンという当たりがありました。「これぞヒジタタキ！」と驚喜して、糸を切られないよう巧みにやり取りしながら、用心深くリールを巻いて水面まで引き上げた魚の姿は狙っていたホワイティングではなくてブリムのものでした。

日本から持参していったシロギス投げ釣り用の仕掛けを使っていたので、海面から高い Jetty に引き上げるうちにハリスが切れしてしまうのではないかと心配でしたが、「南無三」と念じつつ巻き上げて何とか無事ゲットすることができました。



これが現地で「ブリム」と呼ばれている魚です。鯛のことを英語で Sea Bream ということがありますので、多分 Bream が「ブリム」なのだと思いますが、まぎれもなく「黒鯛」だと思います。ここでは魚種によって、サイズの制限があって25cm未満なら放流しなければなりません。そのため、物差しが釣行のための必需品になっています。

日本の黒鯛も雑食性で、夏の海水浴場でスイカで釣れることがあるくらいですが、オーストラリアのブリムも同様で、本来はホワイティング用の餌であるワームに飛びついてきたわけです。このように、

狙っていないのに釣れる魚を「外道」と呼びますが、ブリムのような「外道」なら大歓迎というものです。因みに、この日使ったワームは、イソメの一種に違いないのですが、日本でシロギス釣りに使うゴカイやジャリメなどと違って、恐ろしく長くてブツといものでした。

“Made in Japan”の面目躍如

私は“師匠”らしく振舞おうとして、日本から持参していったシロギス投げ釣り用の仕掛けを当初“弟子”であった東浄さんに進呈したのですが、最初は「華奢過ぎて使えないな」と使うのを躊躇していました。ところが、私がブリムを釣ったのを見ると、オージ一式仕掛けを日本式に換えてから2本竿で二罟打と三罟打の連発。「こんなに釣れたのは初めてだ」と喜びながら合計22尾をゲット。この間、私は手返しが悪いために5尾の釣果しか得られなかったので、呆気なく“師弟関係”が逆転してしまいました。

“出藍の誉れ”の東浄さんの腕前もさることながら、かつてTQC（全社品質管理）という経営思想のもとに世界市場を席卷した日本製品と全く同じように、「より細くより丈夫な釣り糸」を目指して品質改善を続けてきた Made in Japan 製品の面目躍如といったところではないかと思います。



これが、現地で「ホワイティング」と呼ばれている魚です。これも、まぎれもなく「シロギス」だと思います。ヒジタタキには遠く及びませんが、相模湾では余り釣れなくなった25cm級も時折釣れて強い引き味を楽しむことができました。後日(10/6)に“新師弟コンビ”で再挑戦した時は、底荒れが激しくて、私の釣果

は僅かホワイティング1尾にとどまりましたが、その only one のサイズも28cmでした。

“つれない”話

釣行のメインイベントとしていた Deep Sea Fishing Trip の当日(10/8)は、早朝から雨が降っており、ブリスベンから船の乗り場のあるゴールドコーストまでオーストラリア人の友人 Jason が運転する車の車中からも、時折稲光が走るのを見て取ることができました。そして、「もしや」という不吉な予感が的中して、船乗り場に着いた私たちに「キャンセル」という“つれない(釣れない)”連絡が入ってきました。

すると、なおも立ち去り難く未練がましくその場にいた私たちの目の前に、レスキュー船に曳航されたボートが現れました。聞いてみたところ、それはなんと、私たちが乗るはずのボートだったのです。私たちの時間帯の前に船出して釣りをしていたところ、雷が甲板後部にヒットしたため電気回路が破壊されてしまったのだそうです。

青ざめた表情をして降りてきた5人のオーストラリア人の若者たちは、私たちに対して、恐ろしかった様子を口ぐちに語っていましたが、彼らの瞳孔は開いており、中には震え続けている者もいました。そのうちの一人が唯一の釣果だと思われる70-80cmのサメを後生大事に抱えていましたが、その片一方の手に缶ビールがしっかりと握られているのを見て思わず笑ってしまいました。恐怖感の余り、ビールを飲んでいたことも忘れて、手が硬直状態のままになっていたのではないかと思います。Jason は、「もし我々が乗っていたら Hiroshi-san は crisp になっていただろう」などと、クリスチャンにもあるまじきブラックジョークを発していましたが、もし私たちが彼らに代わって早目の時間帯を予約していたら本当に大変なことになるところでした。「地震、雷、火事、親父」などについてノー天気で済んでいたオージー達も、こと雷についてだけは恐れを抱くようになったのではないのでしょうか。

憐れタイ焼きクン

Jason によると、Deep Sea Fishing では、大きなレッドスナッパー Red Snapper が釣れるそうです。私は、肌色により“魚種差別”をして、「黒鯛」に対して赤いのを「真鯛」と称するのは不埒なことで、やはり、オージー流に「赤鯛」と名付けるべきだと思っています。しかし、そんな“義憤”を感じているだけで手ぶらで帰るわけにはいかないので、私たちは乗船場から程近いところにある鮮魚店に立ち寄って、手ごろなレッドスナッパーを“釣って”ブリスベンのQU (Queensland University)の近くにあるJason の家に向かいました。



これがJason宅で包丁を入れられた後のnot caught but bought の“赤鯛”です。この後、更に、アルミホイールにくるまれてバーベキューの鉄板の上で焼かれてのタイ焼きクンとなり、無造作に切り刻まれて来客たちの胃中に収められてしまいました。日本では「魚の王様」として丁寧に取り扱いわれ、綺麗に調理されて食卓にのぼるのに。

閑話休題

釣好きは短気?

「釣り好きは好色で短気」とよく言われます。このうち、短気の方は、充分過ぎるほど自分に当てはまりますし、これが釣り好きとつながる謂われも分かるような気がしています。

「釣れますか などと文王 側により」という川柳からは、太公望がゆったりと釣り糸を垂れている姿が想像できるかもしれません。そして、実際に釣人を見たら「なんと気長な」と思われることでしょう。しかし、これは大間違いで、外見とは裏腹に、釣人の内心は絶えず揺れ動いているのです。ここに

魚はいるのだろうか、エサはまだ付いているだろうか、釣り針が大きすぎはしまいか、釣り糸が太すぎるのでは、そもそもここに魚がいるのだろうか…などなどと気ぜわしく自問しながら逐一チェックを繰り返しているのです。要するに、見えない水中の様子を探るために、様々な「仮説」を立て、それを都度「検証」することによって「情報」を更新するという過程を繰り返しているのです。だからこそ、そこそこの釣果が得られるのであって、のんびりと釣竿を出しているだけでは釣れるものも釣れず、従って、魚釣りがなかなか好きになれないのだと思います。

釣好きは好色？

一方、「釣好きは好色」という言われ方をしますが、これが何故なのか“身に覚えがない”ので依然として理解できないままです。「お前は好色じゃないのか」と詰め寄られたら、決して「No」とは言えないのですが、「好色家」のレッテルを貼られるほどの行動力と実績を持ち合わせているわけではありません。しかし、ヒントが「陸釣り（おかげり）」という言葉にあるのじゃないかと思ったりはしています。本来は、「陸上の水域での釣り」という意味でしたが、これが郭言葉に転じて現在「ナンパ」と同義で使われているからです。つまり、失礼にも女性を魚に喩えて、これを「引っかける」ところが魚釣りに似ているところから「釣好きは好色」となったんじゃないかと思うのですが、「好色家」ではありませんのでこれ以上の論評はできません。

(Part 2) トリオ・ザ・カタクラス奮戦記

夏の到来を告げるかのように太平洋沿岸を北上する鯉が「目に青葉山ホトトギス“初鯉”」と句に読まれているのに対して、秋になって南下してくる鯉は「戻り鯉」と呼ばれています。戻りガツオは、初ガツオの頃に比べて一段と大きくなっていて、泳ぐ力も強くなっているので取り込むのも一苦勞です。ここにご紹介するのは、「東芝釣魚隊」の矢口・清水両隊員とともに、そんな難しい戻りガツオに挑戦して苦戦した時の記録です。カツオ釣り風景を想像してお楽しみ頂ければ幸いです。

風雲の相模湾を彷徨

空は到来する台風の予兆で鉛色。時折、雨が痛いほど顔面にアタリます。6時に茅ヶ崎港を出、魚群を追って1時間半、降り続く雨。これは、ずっと昔にメジマグロ22尾の大漁をした時と全く同じ状況です。大釣りの期待。しかし、あの時とはどこかが違う。台風の余波はまだ及んでおらず、海面にうねりが無く、鉛色の空を映して濁って見えた水も船中のトイレで直下を見ると見事なコバルト・ブルーで澄み切っています。案の定、あの時は濃い霧の中にいきなり現れた鳥山に出会うこともなく「第12まごうの丸」は彷徨を続けています。やがて、真鶴・三ツ石沖、そしてついに初島が目の前に現れました。

敢えなく海中に”戻りガツオ”

待ちに待った船頭の合図に、YSSトリオ、勇んでカタクリ仕掛けを投入。買ったばかりの矢口さんの仕掛けにしてみれば初の海中体験です。カタクリ歴2回目の清水さんとともに、どう見ても慣れぬ手つきでカタクリ始めました。暫くして、トリオの左隣りの大艦に釣座を構えたベテラン風が1尾、次いで今度は、トリオをすっ飛ばして右船首寄りで1尾。さて、戦闘開始と目を移すとトリオの中心に座った矢口さんが無言で糸を上へ上へと手繰っています。「横の方に引いて！両手で持ち替えて！」と船頭の叱声に近い声。みなぎる緊張感。ようやく魚体が浮き面前に銀鱗が光る。やったー、船中第3号。しかし、喜びはつかの間、右隣りの佐々木の仕掛けに一瞬からまったのが悪く、折角の獲物は敢えなく海中に”戻りガツオ”。

船頭の檣も空しく

しかし、この調子なら大丈夫、いつでもリカバリ一可能と意を強くしてカタクリ作業を継続したものの、その後トリオにアタリは無し。大艦のベテラン風の一荷掛けを含めた連続の取り込みを羨望の眼で見ざるばかり。他の釣座からも時折歓声が聞こえてくる。ベテラン風を見習い、心許ない「カタクリ」を本来の「カタクリ」に改めるべく懸命の努力。しかし、三人の道糸には一向に待望の緊張が訪れよう

としない。焦り、挫折感・・・そんな時に今度はトリオ左釣座の清水さんに来た。カッタクリに慣れていないと、どうしても左手がリールになってしまふ。手繰った道糸を左手に巻いてしまう形になる。それでも奮闘の結果、舷側まで寄せた。「慎重に取り込め」と船頭の檄。だが次の一瞬、銀鱗は踊って勢い良く舷側を離れ、清水さんの手にしたハリスは緊張を失った。またしても、“戻りガツオ”。

相次ぐ”キャッチ・アンド・リリース”

さて、トリオ右端に座した小生には一向に沙汰がありません。慣れない矢口・清水両隊員に比べれば、ずっと「カタクリ」より「カッタクリ」に近いのに。装着していた船宿推薦のバケを乗船直後に反対側舷側のベテラン風の薦めもあって、茅ヶ崎・上州屋推奨のハモ皮バケに替えたのが祟ったのか。迷った挙げ句、船宿推薦のバケに戻すと程なく待ちに待った衝撃。「やっと来た!」。しかし、ここは釣魚隊顧問の貫禄を示さねばと落ち着いてやり取り。見事海面に浮かせました。「カツオの取り込みはこうしてやらなくちゃ」。しかし、次の瞬間、船内の胴の間に踊っている筈のカツオは舷側から離れて奔走、空しくバケが空を泳ぎました。「このオヤジなら大丈夫だろう」と思っていたに違いない船頭、トリオの相次ぐ”キャッチ・アンド・リリース”を目のあたりにして「ああ、これじゃ獲れないわ」と大きな嘆息。

「カツオ掬い」のネットワーク

かくて、我々トリオ・ザ・カタクラーズは船頭から「玉網による取り込み」を命じられる仕儀となってしまいました。やはり、コンピュータネットワーク事業部門のYSSトリオには網（ネット）による支援が欠かせないようです。玉網となると、トリオ中心座の矢口さんの出番です。魚群が回ってきたのか小生にアタリ。やり取りしていると頭上から「タモを使って!」の船頭の声。すると矢口さん、玉網を取って。次いで清水さんが仕留めてやり取りしていると、すかさず船頭の声「タモタモ」。そこで、矢口さん。最初のうちは、網から逃れる(NetEscape?)

ケースも出てしまいましたが、次第にネットワークが安定し、小生の3尾、清水さんの1尾、そしてであろうことか船首の竿釣りが食わせた1尾まで掬いあげるとい見事なカツオ釣ならぬ「カツオ掬い」の腕前を発揮しました。

戦い済んで濡れそぼり

穏やかだった海が時化てきて帰港を焦る船頭から早上がりの通告があったのは11時頃だったでしょうか。未練たらたらトリオ。かくて、清水さんが事前に心配していた「クーラーの容量の小ささ」は問題のない結果となってしまいました。折角、吉武隊長殿が先に釣行しておきながら“釣らずに”残しておいて下さったカツオ資源でしたのに。矢口隊員のいわく「残しておいてもらったのは良いが、どこに残したのかははっきり分かるようにしてほしい。」さすがの残暑も終わったのか、濡れそぼりしみこんだ雨がそぞろ肌に冷たい茅ヶ崎港への荒れる船路でした。

家に帰ってから、珍しく素直になって、清水さんが言っていた「タタキは焦げ目が付くほど良く焼いて」を忠実に守ろうとした結果、中心部の赤味まで焼いて白くしてしまう結果となり、貴重な戻りガツオを「焼きガツオ」にしてしまったのが更に残念なことでありましたが、刺身の部は流石に家人に好評でした。特に、同居している義母などは「カツオは手だての漁師にしか獲れないもの」と思いこんでいるものですから、小生をして「カツオまで釣れる名釣師」と評しながら「これまでの人生85年で味わったことのない美味なカツオ」に箸を走らせておりました。

閑話休題

「カッタクリ」の語源について

「カッタクリ」の語源は不詳ですが、「カッ」は「かっぱらう」の「かっ」と同じ強勢の接頭辞で、「タクリ」は「手繰る」から来たものとみています。木の枠に道糸が巻いてあり、その先にステンカン（多分ステンレスの缶でコマセを入れるもの）の付いた大きな天秤（糸がもつれないようにするための道糸とハリスの結合用金具）があるだけで竿は用

いません。餌も用いず、ハリスの先に「バケ」という一種の擬似針を付けて、これをコマセの中を泳いでいる小魚のように見せるため、道糸を「強く手繰る」わけです。

「カッタクリ」の語感が示すように、いかにも古来の職漁法らしく、極めて原始的な釣法です。ですから、紡錘型をしていて泳力の強いカツオが「バケ」に食いついて疾走すると、いきなり指先に強烈な引力と重さが伝わります。下手をすると、引っ張られた道糸と摩擦を起こして指先が火傷状態になってしまいますから、人差し指と中指にはゴムのプロテクターを嵌めます。

ちなみに、「バケ」は「化け」から来ていると思いますが、針に魚皮等からできた薄い膜の小片を付けた物で、これが海中で小魚に「化ける」わけです。その日の潮況に合った「バケ」を選んで使うこと、カツオの食欲を誘うように巧みに「カッタクル」こと、そして釣れたカツオを確実に船内に取り込むことが、カツオ釣のK F S (Key Factor for Success)だと

近況など

7組 山本 哲照 alleinganger@rouge.plala.or.jp

現在「韓流（ドラマ・K-POPとも）」にハマっています。それもどっぷりと・・・2002年10月～12月にテレビ朝日で放映された「イヴのすべて」を見て以来ですから、自分で言うのも何ですが「年季」が入っています。翌2003年4月～9月NHK・BSで放映された「冬のソナタ」で日本に一気に「韓流」ブームが起りましたが、「俺はそれより1年早いんだぞ」という気持ちです。「だから何なんだ？」といわれればそれまでですが・・・

テレビで放映された「韓国ドラマ」で今までに見たものは恐らく70本を超えているでしょう。今でも（2011年11月現在）週に8～10本は見ています。なにしろ「韓国ドラマ」をなるべくノーカットで見たいがために9月から小田原CATVに加入したくらいですから。

「K-POP」も大好きです。今通っている二つのスポーツ・ジムのインストラクターや女性会員にも同好の士がいて、顔を合わせると挨拶が「アンニ

ョンハセヨ（こんにちは）」となってしまいます。先日某銀行の窓口の女性がやはり「韓流病」患者で窓口で投資の話はそっちのけで、「KARA」「SUPER JUNIOR」「少女時代」「東方神起」などの話題で盛り上がりました。11期同期の諸兄もだまされたと思ってTVドラマやK-POPをごらんになってください。そしてビョーキになったら私にお声をかけてください。

内田晶二郎君を偲ぶ

3組 江木紀彦 noriegi@kk.ij4u.or.jp

10月の末に福住昌久君から電話がありました。「内田の晶ちゃんが亡くなったって知ってる？」頼み事があって手紙を出したところ、奥様から折り返し連絡があり、今年の5月に具合が悪くなり、1週間ほど入院し、多臓器不全で意識が戻らないまま亡くなったと伝えられたそうです。お葬式は家族葬のみでどこにも連絡はされなかったようです。

晶ちゃんは私が城内小5年の頃に万年町（昔は唐人町、今の浜町）にお兄さんの耕太郎さん、お母さんの親子3人で引っ越してきました。戸沢さんの親戚ということで、家は弘道院と戸沢さん（今の戸沢皮膚科医院）の間の露地を入ったところにありました。道路を隔てた私の家の庭が近所の子供達の遊び場で、缶蹴り、かくれんぼなど日が暮れるまで一緒に遊んだものです。

第一中学（今の城山中学）1年生のときに稲木先生の組で一緒となりました。稲木先生のお宅のある富水は蛍の名所で、ホタル狩りや何かと理由を付けて晶ちゃん達とよく遊びに行きました。小田高に入ってからあまり付き合うこともなく、大学では入学式の後で記念写真を撮ったりしましたが、理系と文系に分かれたことで、大学内で会うことは殆どありませんでした。

写真は東大入学の報告を兼ねて稲木先生のお宅に伺った時のものです。卒業後に、晶ちゃんのいた三菱化成が私の勤め先の顧客でもあったので、その縁で会ったことがあります。晶ちゃんはあまり話し好きではなく、とつとつと伏し目がちにしゃべる癖が

あったのですが、その時も仕事の話などせずに、元気にやっている？程度の会話を交わした記憶があります。大学時代では陸上ホッケー部で活躍されたスポーツマンで、亡くなる少し前まで元気にゴルフなどされていたそうです。



大沢

江木

福住

内田

多分肺炎に罹ったのが原因だと思いますが、急の話でした。今はただ晶ちゃんのご冥福をお祈りするのみです。無病息災という理想状態は油断が付きもので、一病があつて医者と仲良くした方がよいと云われます。高11の同窓生の皆さんも古希を過ぎましたが、ご自愛のほどお願いします。合掌

訃報

三人の訃報を頂きました。謹んでご冥福を祈ります。

2組 西山国彦様

4組 内田晶二郎様

6組 鍵和田三郎様

なお、同窓会への連絡には会葬御礼または喪中挨拶を添付してほしいとされています。お手数ではありますがよろしくお願い致します。

編集後記

予定より大分遅くなりましたが、第8号をお送りします。今回も原稿の集まりが悪く、無理にお願いして書いていただいた次第です。

メール保有者の数も減少していて、現在は94名の方にこの11期通信をお届けしています。70歳を超えると、やはり健康面で様々な問題が出てきます。皆様ご自愛の上この冬をお元でお過ごしください。

第9号の発刊予定

原稿締め切り：2012年3月31日

発行：2012年5月1日

原稿送り先：cimamich@juno.dti.ne.jp

11期通信掲載先：

<http://www.juno.dti.ne.jp/~cimamich/>